



大人達が皆そうであるように

それは、十年前の戦いよりすこし前のこと。

マゾクは皆双子で生まれる。

わし、フォーも双子だった。片割れが死んだ頃、薄曇りの冬空の下、クロマオーたちが妻の身に宿っていると知った。

当然クロマオーも双子で生まれたのだ。

彼の片割れは、ハイマオーと名付けた。



双子で生まれるというと、まるで能力や容姿が同じものが二つのように思われるかもしれないが

、マゾクの双子は、二体にはっきりした差別がある。

片方が優れ、家を背負い、片方は支える側に回るように出来ているのだ。

ここまで書けば分かるだろうか。

そう、クロマオーは劣っている、よく言えば支える側の子供だったのだ。

そしてわし、フォーもまた、巨星が落ちた後、体中震わせながら国を守ろうとした、余り物の、片割れだった。

戦乱は、いよいよ勢いを増していく。

ハイマオー「クロマオー、面白くない？」

クロマオー「んん……えっと、どうかな？」

多くの双子たちのように、クロマオーはハイマオーの言いなりである。ハイマオーは先ほどから、メイドのロンダの服をミニスカートにハサミで切ってしまうている。ちなみにロンダは御年七十七である。

そんなことをしたら可哀想だと思うのだけど、ハイマオーは強大な力を持つ代わりに、人の気持ちを解さない。

ハイマオー「何だよっつまねーやつ！えいっ！」

小さな太陽がハイマオーの手から発生し、熱烈に光り、クロマオーの肌を焼く。

クロマオー「わわわ！ハイちゃんやめてよっやめてよっ暑いよっ！」

ハイマオー「はははっ！面白いの。今度はクロマオー、真っ黒焦げにしよう！」

双子たちがわいわい騒ぐのを、わしは通りがかって聞いたが、大人達が皆そうであるように、何ももっともらしいことは言わなかった。クロマオーは、「従うこと」を覚えなければいけなかったから。

クロマオーはフライパンで焼いてもかくや、という程黒焦げになり、わしの庭に逃げ込んだ。

わしの庭は、国内だけでなく、ヒトの国の花まで咲いている。これは批判も多い。

自国のものを愛せない非国民だとなじられる。

クロマオーは越時（こしとき）というヒトの国の花の前で立ち止まり、感極まったようにため息をついた。

越時は白い小さな花をつける。丸い葉っぱは斑が入って愛らしい。

クロマオーはこの花が好きである。控えめだけど、いっぱい咲くとまるで笑顔みたいに温かな、この花は愛おしい。

庭にやわらかい風が吹き、越時とクロマオーをわずかに揺らす。

きのうはきみを愛してた

最近、すこし気分が沈むとき、いつも雲がかかる。まるで自分の心に沿うような天気、クロマオーは親友のような気持ちを抱く。

今吹いたやわらかな風は、しかし、気持ちを慰めるような肌ざわりだった。ふと、振り返る。この人が呼んだ風だったのだ。



クロマオーは笑いかけた。彼はものを言わないので、クロマオーも言葉が少なくなるのだ。彼のことは、きのうのともだちと心で呼んでいる。普段はきのう、とだけ。

約束をしたのに、現れなかった友達の代わりに、彼がそこにいたことがあったから。きのう、と呼びかけると、じっとこちらを窺う。落ち込んでいたのが、きのうには分かるのだ。

きのうのことを父のフォーに訊いたことがある。父は困ったように、彼は可哀想な人だとだけしか教えてくれない。

名前すら誰も教えてくれることはなく、ただ、先代の王がきのうを傷つけたことだけは、大人たちの話からおぼろげに理解する。きのうは今ではもう話すことはない。

袖を引っ張られ、井戸まで連れて行かれる。無言で指し示すのは越時の花壇である。水をやろうと言っているらしい。

きのうは不思議だ。先代の王と言えば、クロマオーの祖父なのに、クロマオーをこうして受け入れる。

クロマオーは水を汲んだ。しかし子供には結構な重さだ。きのうはやはり何も言わず、じょうろを手に取り、片手でクロマオーの手を取った。

水をあげると、越時は根からぎゅうっと吸い上げた。虹の中で震える花卉は、まるで天使の羽根

みたいだった。

綺麗だね、とクロマオーは呼びかける。きのうはそっとクロマオーの頭を撫でた。

クロマオーはきのうのことが好きだった。

しかし今思えば彼は、優しすぎたんじゃないだろうか？

どうして泣き喚いて、クロマオーを詰ってぶっていじめたりしなかったんだろうか。

きのうの妻が先代の王に奪われ、死を選び、

きのうは呼ばれていた役職名をなくし、誰にも名を呼ばれることもなくなり

家に帰ってもひとり誰とも話さず、

結果的に言葉を失った。

その話を聞いたのは、全てが終わったあと、工場で働き始めて十歳を過ぎた頃だった。

きのうはその時、クロマオーの目を見て、怯えたように、でも笑ってみせた。

従う者と、君臨する者の違いは何だろうか？

きのうは笑った世界はまわった

きのう、キレイだねえ。

本当にキレイだ。

幼いクロマオーは言葉を知らなくて、ただただそう語りかける。きのうは何度も頷いて、きみの友達だよと確定する。

いつもと同じだった。

そこにハイマオーがやってくるまでは。

空は明るく、日が差し、クロマオーの足元に薄い影をつくっていた。それが突然強烈な黒に変わり、じりじりと肌を焼くような苛烈な日差しに立ち替わった。

振り向くとハイマオーが挑むように目を光らせ立っている。

ハイマオーは怒っているようだった。先ほどの喧嘩（にすらならない苛め）のことを未だ腹を立てているのだろうか。

どうすることも出来ず、見つめていると、ふとハイマオーは笑った。悪辣な笑みだった。

ハイマオー「おい、喋らないのと何してるんだ？何も出来ないだろ、そんなヤツ。」

ハイマオー「暑い、くらいは言えるのかな？」

それならばまだ価値がある、そう言いながらハイマオーは手のひらから太陽を取り出すと、ほとばしる光の渦。

暑いよ、ときのうは言えない。

遠い昔に言葉を無くしてしまったから。

クロマオー「ハイちゃん、だめだよ！」

きのうは言葉にならない呻きをあげて、膝を折る。すこしでも光から自分を守ろうと身を屈めるが、接した肉の間から汗が噴き出し、毛と毛の間がため込んだ汗では顔は泣いたみたいにクシクシになった。

暑いって言ったら許してやるよって、ハイマオーは言った。

クロマオーは初めておなかの底から声を出した。心の声と実際の声が、螺旋のように絡んで、真っ直ぐにハイマオーに向かっていく。

クロマオー「やめろよ！やめろって僕が言ってるんだ！」

ハイマオー「お前が言ったからどうなのさ？お前なんて、ただの……」

誰かの為に怒る。

誰かの為に命をかける。そうだったら、良かったのかもしれない。

クロマオーはしかし、きっかけは侮辱だったと思う。

きのうの為にじゃなかったと思う。

空から激しい雨が、ドラムを叩くみたいに落ちて来た。クロマオーはハイマオーが上を見上げた瞬間に、思い切り彼の事を殴った、殴った、殴ってみたらあっけなかった。すっきりした。

ハイマオーは抵抗したが、体はクロマオーの方が大きかったし、存分に痛めつけられた。

まだ小さかったからとどめは刺せなかったが、きっともし大人だったらこの時殺していたと思う。

でもそれももしもの話なのだ。

世界が終わったきみは回る

きのうに駆け寄ると、クロマオーは自分の中の色々が唐突に整理されるのが分かった。

きのうは優しげに笑っていたからだ。

この話を大人に話す時、余程慎重に言わないと、きのうの尊厳を傷つける結果になってしまう。まるで阿呆で、何事も分からないようなそんな笑顔じゃなかったのだ。

痛い、

苦しい、

でも今は笑ってる。そんな笑い方で、魅力的だった。嘘が無かった。本当に、きのうは、

“きのうは今日もぼくの友達だって思えたんだ。”



クロマオー「きのう……大丈夫？」

きのう「……。」

クロマオー「きのう、ぼく分かったよ。ぼく、ぼくがきっと君臨する者なんだ。ハイちゃんじゃなく……。」

きのう「……！」

クロマオー「ぼくは戦わなかったんだ、ずっと。戦うよ。負けないよ。僕は王子なんだ。」

きのう「……。」

きのうはクロマオーの腕に手を伸ばした。小さなその腕に、越時の花卉が付いていた。先ほどの雨が散らした花卉が、密やかに、存在を主張する。なぞるようにきのうは指を滑らせた。

その時、ハイマオーが立ちあがる気配がした。

頭だけで振り返り、兄弟の屈辱たる姿を拝む。ハイマオーの燃えるような怒りが、クロマオーの喉から息を奪った。掠れたようなひゅうひゅうとした息しか出来ない。

猛然とハイマオーは立ち去った。今にも咲こうとしていた花に一度やつあたりし、茎をぼきりと蹴り折った。そのままの勢いで足音けたたましく去っていた。

それでも兄弟だと、クロマオーは思っていた。

クロマオーはこの話を父にも話した。

しかし父は違うと言う。

クロマオーは理由が分からなかった。だって、クロマオーはハイマオーに勝ったのだ。雨のおかげで隙が出来たのもあったけど、確かに腕っ節で勝ったと思う。

フォー「世の中が、違うと言うんだよ。世の中っていうのは生きているんじゃ。お前は君臨しない。」

一週間、何事もなく過ごした。ハイマオーは一度もクロマオーに話しかけてもくれず、呼びかけに応えてもくれなかった。自分が叩いてしまったからだ、クロマオーは悩む。

だがハイマオーは人の気持ちを解さない。

悲しい歌

今日はきのうの姿を見ていない。

クロマオーは周囲を探しだした。

彼は喋ることが出来ない為、迷ったりすると帰ってくるのも大変だ。まず探してあげなくては行けない。

父フオーは、人間達との交渉に行っていた。父は戦乱を終えたいらしいが、人間は違うのだろうか。大人達のことは分からない。クロマオーは小さな頭で、あれこれと考えながら、段々森の方へ、搜索の範囲を広げて行った。

今日の天気は、清々しい快晴だった。風も柔らかかで、せっせと歩くクロマオーの背中を押してくれるようだった。

きのうに会ったら、何の話をしようか。

ハイちゃんが怒っちゃって口をきいてくれないの、相談してみよう。

きのうは曖昧に笑うだけだけど。

木漏れ日の足元を、ステップ踏むように進んでいく。

風が顔にいたずらして、くしゃみが出る。

それでも前に進んでいた。

誰か焚火でもしたのだろうか。

燃えカスの匂いがする。風が段々暑くなっていく。

クロマオーの顔から、スッと血の気がひく。

無我夢中で駆けだした。

森を抜けてそこは崖になった場所だった。ここに嫌いな食べ物とか、テストとかをそっと捨てる
と誰にもバレないって皆の間に話題になった場所だ。深く深く下まで、要らないものを捨てる、
ダストボックス。

そして大きな太陽。

あんな大ききを見たことがない。ハイマオーは高く掲げ、きのうを燃えカスに変えていた。きのうは一言も発しない。機能を終え、土に帰る最中の姿だ。炭化していく。

クロマオーは叫んだ。何するんだよ、何でだよ、頭が混乱してなに、なに、としか言えない。きのうがもう笑わなくなってしまった。きのうがもう頷いてくれなくなってしまった。何でこんなことする、何でこんなことする？クロマオーはハイマオーの後ろから飛びついて、羽交い絞めにする。何で、なんで、なんで……！

ハイマオー「おまえはおれのものだからだよ。」

ハイマオーは指を閉じて太陽を消した。きのうを助けるためではない。きのうがもう、友達の役目を二度と果たせなくなったからだ。

クロマオーは戦おうとした。けれど、体に力が上手く入らない。

エネルギーの全てが顔に向かい、目からボタボタと落ちていく。クロマオーはダンゴムシのようにまるまった。見てしまった事実が辛すぎて、うまく目が開かない。視界が悪くて、手で何度も拭おうとするけど、ひっきりなしだ。

きのう、きのう、きのう。そう呼ぼうとするのに、情けなく上擦り、うまく言いきれない。

もう何でとは叫べなかった。理由を知ったからではない。戦う気持ちが、殺されてしまったからだ。

僕は君臨しない、クロマオーは悟った。

僕は戦えない。こんな相手に、刃を向けて、自分を主張するような強さが自分にはない。ただ諦めて、従うのが関の山だ。最低だ。

自分の弱さが許せない。

そうだ、僕は泣いている。クロマオーは唐突に、気付いた。

どこで何をしても、ずっと見てるよ。

フォーはクロマオー達にそう言った。その言葉通りに、フォーは混沌としたダストボックスに現れた。

クロマオーはただ泣いている。ハイマオーは、炭化したきのうを、崖の下に落とす所だった。

クロマオーは自分を責める心の声に動けないでいた。いつだって自分の事ばかりで、きのうを本当に守ったことがあったろうか。ずっと助けてもらって、何にも返していない。守られるばかりで、本当に思いやったことがあっただろうか。

自分勝手だった、とても。

何でも自分から話すばかりで、きのうの声に耳を傾けたことがあっただろうか……。

ハイマオーがきのうを崖の下に落とそうとしているのを見て、ようやく自分を取り戻す。

やめろって言おうとしたのに、それすら覚束ない掠れた声。

背後にフォーが立っているのに、二人はそこで気付いた。

フォー「どうした訳かな？」

冷たい声だった。ハイマオーは、悪びれることもなく、

「きのうはものが言えない自分の人生を悲観して、自分に火をつけて死んだんだ。」と言った。

違うと言うのが怖いクロマオー。正に、従っている状態だ。

フォーはきのうの遺体の周りを一周する。ヒトとの話し合いはどうだったとか、ハイマオーが声をかけた。フォーはそれに応えず、クロマオーの目を真っ直ぐに見つめた。

その目は、いつものフォーの優しげな目とは違った。とても厳しい、誰が何と言おうとマゾクを続ける王としての目だった。真価を問い、残酷に、クロマオーをじっと見た。

今が岐路だと、クロマオーも気付いた。

確かに、悪意を倒すことは自分には出来ない。その上に立ち従わすことなど、自分には出来ないのだ。こんなにも足から力が抜けている。

しかし、クロマオーも子供の論理で計算することは出来る。フォーがいる今ならば、と。

クロマオー「ハイマオーがやったんだ。きのうは、可哀想にも殺されたんだ。フォー。」

クロマオー「ハイちゃんがやったんだ！！」

ハイマオーが拳を振り上げ、こちらに向かおうとした。

馬鹿なハイマオー。

ハイマオーは人の心を解さない。

もう拳ではないのだ。

フォーはハイマオーの腕を取ると、つられて上がった目線を捉え、宣告した。

フォー「わしはお前を中絶することにした。」

ハイマオーの瞳が鈍く銀色に光る。ナイフが錆びていくように、目がすっと細くなる。

フォー「今までの王とワシは違うのだ。ワシは弱く、ずる賢いよ。クロマオーはワシそっくりだが、お前は愛せない。だから、ごめんな。お前は要らない子なんだよ。」

ハイマオーは無茶苦茶に暴れ出した。けれど小さな子供なので、フォーは易々と抱きとめる。傷ついているだろうか。クロマオーはハイマオーの顔を目で追うが、分からない。自分が親の愛を勝ちえたことが信じられない。親の気持ちが分からない。

きのうの気持ちも分からなかった。

クロマオーは子供で、自分勝手だった。

でも本当に悲しかった。嘘じゃない。

手に入れた全てが欲しかったから。

フォーの目が、コーヒーに溶けるミルクみたいに色に移り変わり、ハイマオーは動かなくなった。糸を失った操り人形のように、手足がダラリとする。その場に横たえたので、クロマオーは駆け寄った。

フォー「ワシは何にも出来ないが、心を飛ばすことだけは出来るんだ。お前も注意した方が
良い。」

こんなことはしたくないのだけど、と。

フォーはハイマオーを抱き上げ、崖下に落とした。大人は、本当に怖いと思った。だけど、フォーはクロマオーを抱き締めた。お前が一番可愛いと言う。

越時が好きな、ワシの息子と笑う。

後からクロマオーが訊いた所によると、フォーを取り巻く状況は当時かなり切羽詰まったものだ

ったらしい。ひどく責め立てられ、存在を否定された。よく似た息子が虐げられるのは、自分に重なった。

立派な殺人だったとも思う。

それでもクロマオーは、強くなれたと思う。

愛されて選ばれて、自信が出来た。

悲しい気持ちは消えないけれど————



最低なきみが人を好きになる

それから色々あって、現在に至る。

クロマオー「今日はシロさんに父の話をしようと思ったんだよ。」

塀の上に猫みたいにいるシロバンチョー。ネイは何だかあわあわしている。何だろうか、今日はまだうんこしてないし。

シロバンチョー「親父さんの話なんていいよ。ジュンジュンじゃあるまいし、おじさんの話聞いても……。」

ネイ「そうだよ～～。シロバンチョーはマニアックじゃないのよ！」

ネイは大げさにうんうん頷いてる。

“そっか、ネイちゃんは僕がマゾクの王子だったってまだ言うのは早いと思ってるんだ。”

クロマオーは納得し、でもちょっとどうしたらいいか分からない。何故なら今までの付き合いは全て父を介したもので、王子という扱いの上で、築いてきたから。

クロマオー「花が好きだったんだけど、今は離れてるんだ。シロバンチョーはお父さんと一緒に暮らしてるの？」

シロバンチョー「殆ど顔合わさないよ。忙しいから。」

クロマオー「もったいないよ。もっと一緒にいないと。せっかく会えるのに。」

ネイ「……。」

クロマオー「せっかく親孝行出来るのに、しないなんて。僕、本当に会いたいよ。父は……弱いから、僕が介護してあげないといけないんだ！」

クロマオーは笑った、けど、もしかしたらフオーはもうこの世にいないのかもしれないとも頭に浮かんだ。だから我慢してるような、皺が眉間に刻まれた笑顔になってしまった。

シロバンチョーは口を引き結んだ。

シロバンチョー「お前が思うより、ずっと親は強いものだよ。なんたって、自分を生み出した人なんだから。」

クロマオー「……うん。」

シロバンチョー「親を守るなんて想像できない。まだまだ現役で働いてるし、いつも帰って来ても何も言わないし、守ろうだなんて、思わないな。」

ネイは下を向いた。

気付いたのだ。今この三人の中で、親と暮らせているのはシロバンチョーだけだと。近くにいない二人の方が、親を恋しんで、助けたいと思ってる。救いたいと思ってる。それをいつもは心の大事な所にしまいこんでいるけれど。

クロマオー「僕が言いたいことは一つなんだ。夜にこうやって会うのはダメだ。シロさんのお父さんが心配するだろう？だから遊ぶならもっと別にやり方があるって思うよ。夜に会うのはネイちゃんだけでいいし。」

シロバンチョー「さり気にやらしい考えをするな、お前は！」

クロマオー「やらしいことなんて考えてない！まず婚姻届にサインする所から始めるつもりだ！」

ネイ「いきなり—————?! 」

結構勇気を出して言ったのに、ネイは冗談としか思っていない。クロマオーはやれやれと、見上げたシロバンチョー。

シロバンチョー「分かったよ。親孝行するつもりはないけど。」

むしろ親を不幸にすることを自分は望んでいるのかもしれないが、と思い、シロバンチョーは目線を横に流した。

ネイ「任せなさい。私がいるのよ！」

外に連れ出すわ、ネイが高らかに宣言した時、ポロッとクロマオーの口から何かが飛び出して、彼は真っ赤になった。

入れ歯かと思って、他二人は動揺した。

制裁と、クロマオーと。(7)に続く。